助成 日本財団 The Nippon Foundation

平成21年9月14日 親学研究会

人格はどのように形成されるか

慈しみ育児研究所 所長

二村元夫先生 講演録

主催 親学会

胎児期の記憶は、「音」の記憶から

皆さんの中には、「おなかの中の赤ちゃんに記憶があるのだろうか」という疑問をお持ちになられる方がいらっしゃるかと思います。同時に誕生の時の記憶や、お母さんのおっぱいを飲んでいるときの乳児期の記憶。まだ言葉も出ていない乳幼児期の記憶。そういうもののエピソードを通して、人間の人格がどういう風に形成されてくるのかということをお話ししたいと思います。

現在の脳科学では、お母さんのおなかの中に命の芽生えがあり、1ヶ月、2ヶ月、３ヶ月･･･とおなかの中で時間が経過し、胎生５ヶ月で「聴力」ができあがってきている、といわれています。おなかの中で赤ちゃんは、お父さんとお母さんが会話している話声も、買物に行ってお店の方々と会話している話声も、実は全部、聴いていることが分かってきています。しかし、そういうことを言われても、私たちは「ほんとうかしら?」と疑問に思ってしまいますね。私たちは目、鼻、耳、口、そしてこの皮膚であり、この五感を通じて外界からの刺激を受けています。言葉もひとつの刺激ですね。胎児や赤ちゃんは、この五感の刺激を記憶として、脳の中へ蓄え込んでいくわけです。最初は何の記憶もないはずです。おなかの中で脳もいっしょに作られ、それがおなかの中で半年も経ってきますと、耳から聞こえてくる音があるわけですからその「音」を記憶していくわけですね。もしも、お父さんとお母さんが妊娠中から喧嘩をしているとすれば、そういうことも全部記憶されるわけです。ですから、穏やかな妊娠期を過ごすということは、生まれてくる赤ちゃんにとって、本当に大切なことなのです。

五感を通した「記録」が、脳のなかの「辞書」となり、「性格・人格」を形成する

最初は、「心地よいか」「不快か」ということを記録していくのです。「快でもなく不快でもなく中立」、無色透明ですよ、ということも脳の中に記録していくのです。その後、「旨い」「不味い」、「好きだ」「嫌いだ」、「楽しい」「悲しい」といったことを記録していく。その脳の中に記録されたものの集積、集大成したものが、そのお子さんの人格なのです。

別の考え方では、『赤ちゃんの時からその方の脳の中に辞書づくりをしている』と考えてもらえば非常に分かりやすいのです。1歳になり2歳になり、やがて小学校になりますと、新しい体験や経験を照らし合わせて「あっ、これ、前にあった!!」と、「これは楽しいこと」「初めての経験だ」などと辞書を足し算していくわけです。いわば増補改訂という形になります。素晴らしい先生と出会って、今まで体験してきたことは実は間違いだった、ということを得心していくとそこで、脳の中の辞書づくりが変わっていきます。少年期に素晴らしい先生と出会って、それまでの人生とは180度違うような場面にあたる方も何人かいらっしゃるわけですね。

しかし、一般的には胎生期から、生まれてから、命をいただいてから、ずっと五感の刺激を受けて記録してきたものの集大成が、その人の人格を形成しているのです。ですから、「バカだ、アホだ」という会話のないご家庭で育てば、「バカだ」と他人様を罵倒する言葉が出てくるわけはないですね。一度も聞いたことがなければ、使えないのです。そういう過去の記録に基づいたものが人格であり、性格なのです。

この「胎児期における記録」というのは2000から3000年も太古から言われてきたことではあるのですが、だれもが半信半疑で、長い間信じられてこなかったのです。現代になって、ようやく科学的に解明しなくてはならない、証拠が必要だということになりました。ソニー（株）の創業者である井深大さんが主催されていた財団法人幼児開発協会において、胎児期における記憶の研究を目的に、妊娠中のお母さん50人ほどのご参加を得て、「ドミソクラブ」というのが立ち上げられました。1981年のことです。
このドミソクラブのお母さん方からのレポートで「生まれてきたことを覚えています。私はそう思います」という感想が出てきたわけです。

翌年1982年には、医学博士のトマス・バーニー氏が「胎児は見ている～最新医学が証した神秘の胎内生活」(祥伝社)という本をお書きになって、後に国立小児病院の名誉院長になられる小児科医・小林登先生が翻訳されて、はじめての書物として、日本でも紹介されました。この本の中で、自閉症の4歳の女の子のお話が紹介されています。
フランス・パリの学校でアルフレッド・トマティスという先生が、自閉症の女の子オディールさんの診察をしたのです。この少女は４歳になるのですが、なかなか言葉が出てこない。原因が分からない。ところが面談をして、ラジオから英語が流れてきた。そうしたらオディールさんの表情が変わり、英語が分かるのか、ということになったわけです。トマティス先生はお母さんに根掘り葉掘り聞いたわけです。そうしたら、妊娠中にお母さんはイギリス系の会社に勤めていたというのです。日中は英語圏で生活していたというのですね。そして、誕生後はフランス語ばかりの世界だというのです。オディールさんは、実はとまどっていた状態だったのではないか、とトマティス先生は見立てられたのです。少女にとって言葉の出しようがないわけです。改めて一から「辞書づくり」をしなければならないのですから。フランス語の辞書づくりをするのに、２年や３年はかかるのではないでしょうか。

おなかにいたときの記憶は、生まれてから後もずっと持ちつづけている
1983年に幼児開発協会では、加藤忠明先生、高橋悦二郎先生、水上けいこ先生、田中登先生、そして幼児開発協会の方から樋口のぞみさんという研究員が加わりまして、記憶に関する学術実験をしたわけです。
小林一茶の俳句が2首あります。

- **猫の子のちょいと押さえる木の葉かな**
- **栗拾いねんねんころりいいながら**

この実験に参加していただいたのは愛育病院で診察を受けていた妊婦さんですね。まず、NHKのアナウンサーに俳句を読み上げてもらいテープレコーダーに録音しました。そのテープを妊婦さんのおなかから30cm離したところで回しました。①つは、「妊婦さんに、「猫の子の」を一日2回、のべて125回から230回赤ちゃんに聴かせてあげる。無事に生まれてきたところで、二つ目の「栗拾い」の句とその他に「実験に協力くださりありがとうございました」という声を赤ちゃんに聴かせ、赤ちゃんの脈拍や心拍を測定しました。
②つ目は、生まれる前に何も聴かせていない赤ちゃんにも、誕生後は「猫の子の」「栗拾い」「実験に協力くださりありがとうございました」というのを聴かせました。
そうしますと、妊娠中に聞かせた①の赤ちゃんの方は「猫の子の･･･」が聞こえてきたときは明らかに他の赤ちゃんとは違う。「知ってるよー。前に聴いたことあるよ」という反応をしたわけです。②の赤ちゃんは、俳句二首と「実験にご協力くだ

さり･･･」とはじめて聞いた赤ちゃんたちは「何を言っているのだろう?」といった雰囲気で聞き耳を立てた反応が脈拍に出たそうです。明らかにリアクションが違うわけです。これは教育心理学学会や保健小児学会等の学会でも先生たちから発表が行われています。おなかの中の赤ちゃんは記憶を持ち続けているのです。まして、生まれてきた赤ちゃんは充分すぎるくらい記憶をもっているわけです。1983年にNHKで放送された「赤ちゃん～胎内からの出発～」というビデオから、お母さんのおなかの中の血流音を赤ちゃんが知っているよ、ということをビデオで見ていただきたいと思います。このビデオから分かることは「おなかにいたときの記憶というのは、生まれてずっと保っていると言うことです。」

「胎内で聞いていた音楽をまるまる覚えていた」という事例をお話ししましょう。先ほどの「胎児は見ている～最新医学が証した神秘の胎内生活」の中にカナダのオンタリオ州・ハミルトン交響楽団の指揮者であるボリス・ブロットという方が、ご自身がおなかにいたときに聞いた音楽の譜面がひとりでに頭の中に現れてくる、と告白しておられます。
音楽の世界では人の話として証明されて来ているのですね。ロシアのバイオリニストのレオニード・コーガンさんという方がいらっしゃるのですが、井深先生の話が残っています。コーガンさんの奥様も音楽家で、妊娠中の時に、人から頼まれて特別の曲を発表するために練習していたそうです。その曲は、特別なものなので演奏会が終わってしまえば、弾かれることもない曲です。やがて娘さんが生まれ、成長されてバイオリンを練習するようになって１年ほど過ぎた頃、おなかの中にいたときの特別なその曲を、ある日突然演奏しだしたそうです。もちろんラジオからもテレビからも放送されたことはないのです。これは間違いなくおなかの中にいたときの記憶を、自分の持っている腕で表現できたということなのです。

もうひとつ、医学博士である大島清先生のお話をご紹介しましょう。
大島先生は60歳すぎて、名古屋でバイオリンを習っていらっしゃいました。大島先生のバイオリンの先生は、娘さんを5人もお育てになったそうです。１番上の方と２番目の方、４番目と５番目の方には妊娠中に色んな音楽を、たくさん聞かせたそうです。ところが真ん中のお子さんだけは「ユーモレスク」ばっかり聞かせていたそうです。で、このお嬢さんが２歳だか３歳だかになって、バイオリンを学ぶようになりました。曲が弾けるように上達した頃、ある日突然、教えてもいない「ユーモレスク」を演奏しだしたそうです。バイオリンの先生として教える楽曲の順序があるので、「ユーモレスク」は教えていないそうです。お母さんは、ひとつの事例として京都大学の脳科学の研究をしていらした大島清先生にご注進をなさったらしいのです。
この他にもいろいろなところでこれらの例と似たようなお話が世界中でいくつもあるようです。皆さんのお近くの方にもこういう事例があるのではないでしょうか。音楽でこれだけの記憶があるのですから、会話のなかでの言葉による記憶もあるのではないでしょうか。先ほどのトマティス博士のオディールさんの話もそうです。言葉をおなかの中にいるときから覚えている。胎児はおなかの中で辞書づくりをしているのです。

おなかにいたときの「指のシワシワ」まで記憶している
胎内にいたときのその他の記憶についてですが、

ある２歳６ヶ月の子が、お母さんといっしょにお風呂に入ったときのことです。お風呂に入ると手の皮膚がシワシワになりますよね。それを見て、その子が「ぐちゃぐちゃになっちゃった」とおしゃべりをはじめたんですね。「おなかにいる時もそうだった」と言ったのです。これは、お母さんのおなかにいたときのことを知っている、ということです。この子の場合は生まれた時のことを、「うーんうーん」とうなって出てきたよとか、誕生の時の話や、「おなかの中のお風呂にも入った。熱かった」というような表現をしたようです。
この子自身は「手がぐちゃぐちゃになっちゃった」と形容し、そこでお母さんが「ぐちゃぐちゃではなくて、シワシワっていうのよ」とひとつ言葉を教えたそうです。そうしたら二日後にいっしょにお風呂に入ったときに「あっシワシワ」とまた表現したそうです。さらに風邪気味になって５日ぶりにお風呂に入ったとき、「足もシワシワになっちゃった」と言ったそうです。そういう話をくり返されたそうです。胎児期の感覚の記憶もあるのですね。

妊娠中のお母さんの心の状態を記憶している胎児たち
山本容史和先生の「母親の生き方が子に伝わる・人格、性格は伝わる」という話があります。この山本容史和先生は四国の徳島で薬局店を代々営まれている方で、ずっと胎教の研究をされていた先生なのですね。「とんびが鷹を生む話」というのがあって、ふだんあんまり片付けが好きでない方が、妊娠したとたんに几帳面な性格に変わったそうです。そして、お産が終わったら、このお母さんはもとの性格に戻ってしまったそうです。お子さんが、４歳、５歳になったときに大変に几帳面で、妊娠中のお母さんの性格をそのまま受け継いでいたそうです。このお母さんが妊娠中に几帳面に大変身した理由はわかりません。お母さんは胃下垂だったそうですが、妊娠すると胃が上がります。そうするとやる気がでるそうなんですね。おそらくこの変化が現れたようです。
また、トマス・バーニー氏は、お母さんの乳房を拒絶するクリスチナという話を紹介しているのですが、妊娠中お母さんが、実は赤ちゃんを産みたくなかったのに、いやいや出産しました。生まれてきた赤ちゃんはお母さんのおっぱいを拒絶したのです。ほ乳瓶の粉ミルクはごくごく飲み、ご近所の方のおっぱいは貪るように受け入れたそうです。母親のものだけ拒絶したということです。
最近の本では、池川明先生の「胎内記憶」(角川SSC新書)という本にもあります。胎児期の記憶というのは紛れもなくある、と考えていただいてよいと思います。誕生の時の記憶についても、同じようにデービット・チェンバレン先生の「誕生を記憶する子どもたち」という本が1988年に春秋社から出ております。出生時の、医師、看護師、両親の何気ないひと言ひと言に傷つき、一生の心の傷になってしまうことがあると書かれています。特に医療従事者の不用意なひと言は、やめてもらいたと思っています。

幼児開発協会あるいは公文教育研究会で、お母さん方から報告をいただいたり、アンケートから抜粋して誕生の記憶を本にまとめたものがあります。
２歳７ヶ月のお子さんが、たどたどしい言葉でこう言いました。「おなかにいるときはピンクのヘビさんと一緒にいた。やさしいヘビさんと意地悪なヘビさんがいた」と。ヘビというのはヘソの緒のことなのでしょうね。
「おなかから出てきたとき誰かいた?」という問いかけには、熊さんがたくさんいて、抱っこしてくれた」と。この熊さんというのが、白衣に身を包んだお医者さんや看護婦さんのことです。シロクマをイメージしたのでしょうね。「あけてーあけてー、といったらおなかがパカっと開いて助けてもらった」と。この子のお母さん

は帝王切開です。「黒い熊さんがいた」とも言っています。これは、おそらく黒服を着ていた麻酔科の先生なのではないか、ということです。「生まれたとき熊さん何か言った?」。するとそのお母さんの胸を見つめながら何かボソッと言ったようだったのでもう一度聞き返しましたら、「な・か・せ・て・く・だ・さ・い」。つまり帝王切開で取り出したときにお医者さんがそう仰ったのですねぇ。そうしないと、肺の空気呼吸のスイッチが入りませんから。

チェンバレン先生の著書の中で、良くない事例としては「逆さにつり下げられたこと」「おしりを叩かれたこと」「注射をされて痛かったこと」「おとこの子で良かった」「おんなの子で良かった」「名前についての言い争い」というのがあります。お医者さんにつかまれたために、こめかみや首が痛かったことや、誕生後すぐに新生児室へ連れて行かれたことの不満や不安、悲しみ、さびしさ。そのようなことも記憶しているのですね。

乳幼児期に「記憶がよみがえる」

0歳4ヶ月の時の記憶が１歳２ヶ月の時に蘇る、という話もあります。
団地に住んでいたお子さんの話です。団地には２つのタイプがありますね。階段があって、長い共通の廊下ががあるようなタイプと、一階から四階まで階段が付いていて、階段室の両側にお部屋のある団地がありますね。この子は後者のタイプの団地に住んでいたそうです。そして祖父母も同じ団地に住んでいたそうです。ただ、祖父母の住まいと自分の家と、使う階段が違っていたそうなんです。0歳4ヶ月の頃まで、お母さんに連れられては、よく祖父母宅に遊びにいっていたそうなのです。ところが、0歳4ヶ月をすぎた頃に、祖父母は何かの事情があって、大阪まで引っ越しをしてしまったそうです。そうすると、今までのようには行けなくなるわけですね。このお子さんが１歳２ヶ月になった頃、充分に歩けるようになり、お母さんと出かけた散歩の帰りに、自分の家の階段は通り越して、祖父母の使っていた階段を上りはじめたそうです。そして、お母さんの顔を見上げたのです。自分の足で歩けるようになった時に、自分のお母さんをかつての祖父母宅に連れて行って、「ひさしぶりに行こうよ」と促すわけです。0歳4ヶ月でもしっかり記憶されているわけですよね。しかも「わたしは、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんが好きよ」ということなのですね。私はこの話をきいて感動しました。

「約束」できる、9ヶ月の乳幼児の記憶

９ヶ月時の約束、自律心についてです。
大阪の堺市の保育園の事例をご紹介しましょう。お母さんが乳腺炎でおっぱいを吸わせるのが辛い、赤ちゃんにおっぱいをやめてもらいたい、と保育園の先生に相談したそうです。先生が、その赤ちゃんを呼んで「お母さんが大変で、おっぱいやめたいそうなのよ。やめてくれるかな?」と相談したのですね。そうしたら、なかなかうん、とは言わない。顔を背けるので、その子の顔の方に移動して「お母さんがおっぱいやめてもらいたいそうなのよ。やめてくれる」と、また頼んだらしいのです。すると、その子はまた顔を背けるわけです。先生は顔をもどして、また同じように頼む。何回かくり返したそうです。
そして家に帰って、この子はおっぱいを飲むためお母さんの胸元を開こうとして、やめたそうです。先生との約束を自分で守ったそうです。この話を聴くまでは、内藤寿七郎先生の「２歳児の約束」を何度も聞いたりしていました。２歳児でも約束をできるのだと思っていましたが、１才未満の9ヶ月の乳児が約束できるのですね。ちゃんと先生との「約束」を記憶しているのですね。

何日か前の記憶を、もういちど体験したい１歳4ヶ月児
1歳4ヶ月児の歩き始めたばかりの子どもが抱っこをせがむ、という話。
家から出てお買い物に出かけるわずかな距離の話です。家から出たばかりの話で、疲れているわけではないのに、このお子さんが「疲れたぁ」といって抱っこをせがむそうです。
何で抱っこをせがんでぐずるのだろうか。そこで叱りつけても仕方がないのですね。子どもさんには子どもさんの理由があるわけです。
抱っこされると、子どもの目線が高くなりますよね。その時に「カンナの花が咲いていた」とか「電車が見えた」とか、もう一度見てみたいという気持ちなのですね。抱っこされてそこを通ったときに見た風景を、もう一度見てみたい、という気持ちだったのですね。だから抱っこしてほしい。何日か前の記憶をもう一度見てみたい。感動を覚えてみたい、と言うことなのです。疲れてもいないのに、「抱っこして」とグズグズすることは、その子なりの理由がある訳なのですね。

動物も人間も、育てられたようにしか育てられない
動物の事例では「オランウータンの初子の記憶」というのがあるのですね。
これは、上野動物園で昭和30年頃の話だと思いますが、日本ではじめてオランウータンに子どもが生まれたのですね。オランウータンの母親に育児をさせれば良かったのでしょうけれど、動物園の飼育係の人が人工飼育をしたわけです。初子は大切だ、ということで、大切にかわいがって育てたわけです。順調に育って、やがて初子も妊娠の時を迎えたわけです。初子自身は、お母さんオランウータンに抱かれておっぱいをもらった経験がないわけです。自分が親になったときに、子に飲ませることを知らないわけです。産み落とした子供を踏みつけんばかりにしてしまうのではないか。結局、初子の子どもも人工飼育せざるをえなくなりました。授乳くらいは本能でできることだと考えがちですがそうではないわけです。

山口県宇部市の常磐公園の「桃色ペリカンのカッタくん」の話なのです。
何年か前にテレビで放映されていましたね。カッタくんは毎日幼稚園に通ったそうです。桃色ペリカンは羽を伸ばすと２メートル近くなる大きな鳥です。このカッタくんは人工飼育です。常磐公園内にあるペリカン島が、大水による被害に遭いました。ちょうど繁殖期を迎え、卵が水につかりそうになったのですね。そこでやむをえず卵を取り上げて人工孵化させ飼育したわけです。人工飼育で育てたうちのオスがカッタくん。人工飼育で生まれたメスは羽根をカットしてもらい、仲間のところに戻りペリカン島で暮らしたそうです。一方カッタくんは自由気ままに育てたそうです。空の散歩も楽しんでいるうちに、幼稚園が気に入って、子どもたちと仲良しになって、歌を唄ったり一緒に過ごす時間を楽しんだそうです。やがて、年頃になってつがいになるのですが、４年目までは失敗。５年目にようやく三羽ひながかえったそうです。ひなが返ってからがカッタくんの記憶が問題になります。
メスは餌を捕獲してペリカン島に戻って赤ちゃんに餌を与えます。ひなたちはメスの餌なら食べられるのに、カッタくんの与える餌は食べられないのです。なぜか。それは、カッタくん自身が、人工飼育で育てられた時の記憶のもとに餌を与えていたからです。
卵から孵化したばかりの雛であった時のカッタくんに与える餌については、飼育係の方も大変苦労されたそうです。新鮮な魚を叩いてミンチにし、消化酵素などをまぶして肉団子をこしらえます。生の肉は簡単に扱えないので肉団子を湯通しします。湯通しをして少し固めにした肉団子を与えていたそうです。餌の固さ加減が、

生の魚と同じ固さだったわけです。メスの方は、一度半消化状態にしてから、雛にあげていた。カッタくんは飲み込まないでそのまま雛に渡していた。結局三羽のうち、一羽しか育たなかったそうです。動物も、自分が赤ちゃんの時に育てられたようにしか、育てられないのです。

シートンの動物記の中にも「ニューヨークの雀」というエピソードが紹介されています。ニューヨークの床屋さんが地面に落ちていた雀を拾って、飼育していたカナリアと一緒に育てたそうです。雀とカナリアでは、巣の素材が違うそうです。
雀は、やわらかい枯れ草などで巣を作り、カナリアは、もう少し硬い小枝で作るのです。床屋さんで育てられた雀は、巣の記憶がカナリアと一緒になっているわけです。この雀が、何かの拍子に逃げ出し、野生に戻ったそうです。問題の巣作りですが、カナリア式の硬い巣をつくってしまうのです。パートナーの雀がそれを壊し、結局作っては壊しのくり返しだったそうです。乳児期の記憶は、動物も人間もとても大切だということがわかりますね。

幼児開発協会に来ていただいたお母さんの中でも、そういう事例があります。
赤ちゃんをうまく抱くことができない不自然なお母さん。腫れ物に触るように、おそるおそる抱く抱き方なのです。しっかりと抱き留めることのできないお母さんがいらっしゃいました。人は親になったときはじめて、育ててもらったように子どもを育てる、ということなのではないでしょうか。もちろん100％ではないですし、男性と女性でもその比率は違います。虐待を受けて育った子どもが母親になったとき、じぶんの子どもにも虐待をする傾向にある、ということだと思います。世代間伝達、虐待の世代間伝承が6割から７割ほどと言われ、虐待されて育った子が親になったとき我が子を虐待してしまう。

「おんぶ」は最高のスキンシップ、そして、二十四時間の生活そのものの充実が最高の「胎教」
井深大氏へのJ・W・プレスコット博士の手紙をご紹介しましょう。もう二十数年前の話、1983年の手紙です。

赤ちゃんの脳の発達、情緒的社会的行動の発達にとって、決定的に重要なのは、
接触(スキンシップ)と母親が身体につけて赤ちゃんを運ぶその運動なのです。
最近の動物実験でも明らかになったように、赤ちゃんザルに対しこの接触も運動も
与えずに育てますと、脳の障害を起こし、その結果この猿は著しく異常な情緒的社会
的行動をとるようになります。つまり抑鬱状態になり、社会性を失い、極端に暴力的
になるのです。この研究は日本の文化にとっても重要な意味を持ちます。
日本が伝統的な子育ての方法を捨てて、欧米的な育児法を取り入れたことで、
おんぶをやめ、母乳育児が減り、親子のスキンシップが不足し、その変わりに保育所
的な子育てが普及してきたことです。
この子育ての変化は、将来の日本にとって重大な影響をもたらすでしょう。
家庭の崩壊、犯罪、暴力、殺人、自殺、麻薬、アルコール中毒などが増加し、

学習障害が顕れ、日本人の優秀な知的創造的発達を阻害する結果となるでしょう。
これはすでに欧米諸国において実験済みのことなのです。
身体を通しての愛情の不足、母子の絆の不足がその原因だったのです。

街を歩いていて気になりますことは、「おんぶ」の姿が非常に少ないことです。抱っこは多いです。しかも抱っこひもに預けてしまう抱き方ですね。子を預けた形で歩いていらっしゃるお母さんの姿を見ると、私は悲しい気持ちになります。おんぶの復活をお願いしたいと思います。おんぶが元に戻ってもらいたいと思います。

また「胎教」というのは、私たち日本人は中国から教わったのです。中国では3000年の昔から伝わっています。その正しさが今はじめて科学的に分かって来つつあるのです。このことを、諺で表現しますと『三つ子の魂百まで』ということになりますね。
胎教についてですが、「胎教を○時間した」とか「胎教はしていない。そんな暇はない」とか、色々と言われておりますが、胎教というのは、実は「妊婦さんの24時間の生活そのものですよ」ということなのです。このことをぜひ、皆さんの周囲の方にお話ししていただけたら、と思います。これを間違ってしまうと「子どもをいい子に育てたい」と過剰な胎教をしてしまいます。赤ちゃんと一緒の生活、24時間そのものを充実させることが、最高の胎教となるのではないでしょうか。

(文・構成　古崎千穂)